

2008年度を振り返って

多言語・多文化教育研究センター長
北脇保之

本センターとして3年度目の年次報告書をお届けします。本2008年度の位置づけを一口で言えば、2006年度にスタートした「多言語・多文化教育研究プロジェクト」において当初から企画されていた事業がすべて出そろい、エンジン全開の巡航状態に入った年といえることができるでしょう。

教育分野では、Add-on Program「多言語・多文化社会」について、実習およびプレゼンテーション部門が開講され、全20単位分の授業がすべて用意されました。「実習」では、地方自治体や国際交流団体の協力を得て、外国につながる子どもたちに対する学習支援や外国人専門家相談の現場に学生たちが積極的に参加しました。学生たちの中には、実習終了後にもボランティアとして活動を続ける者も出てきました。「プレゼンテーション」は、いまだ履修条件を満たす学生が少なく、残念ながら今回は受講者がいませんでしたが、Add-on Programの仕上げに位置付けられている科目ですので、2009年度には受講者を必ず確保し、Add-on Program 修了生を送り出していく予定です。

多文化コミュニティ教育支援室の日本語・学習支援、国際理解教育の活動は、約400名の学生が登録し、さらに充実しています。本年度は、神奈川県高等学校が共同で実施した、高校生のための国際理解教育プログラムにも参加しました。

研究分野では、新たに「世界の多言語・多文化社会研究」が始まりました。世界の多言語・多文化状況について、政策、言語、教育、文化などの面からアプローチするもので、本学教員および本センターのフェローを中心に、学外の研究者も含めて研究会を組織しています。研究会は、月1回のペースで開催され、2009年の2月にはこの研究の方向づけをするため、「トランスナショナル/トランスカルチュラルな比較地域研究」をテーマに国際シンポジウムを開催しました。シンポジウムには、基調講演をお引き受けいただいた、オーストラリア国立大学のテッサ・モーリス・スズキさんをはじめとする海外ゲストも参加し、知的刺激に満ちた内容となりました。今後は、この研究と、従来から取り組んでいる日本社会の課題に関する「協働実践研究プログラム」とを結び付けることにより、世界的な視野の中で私たちが直面する社会的課題に取り組んでいきます。

また、本年度は、文部科学省の「大学教育国際化加速プログラム」に採択された「大学教育の多文化化推進プログラム」を実施しました。プログラムは、世界各国の多文化化状況とその中での留学生政策の調査研究および本学の「大学教育多文化化」に関する提言からなっています。前述の国際シンポジウムはこの調査研究の一環として行いました。「提言」は、キャンパスグローバル化推進室に設けられたチームで検討し、その結果を取りまとめて大学当局に提出しました。

社会連携分野では、文部科学省の「社会人学び直しプログラム」として委託を受けた「多文化社会コーディネーター養成プログラム」を実施しました。政策、学校教育、市民活動の3つのコースに各10名ずつ参加し、約半年間の中で、理論的学習、参加者のワークショップ、現場での実践、論文作成、プレゼンテーションなど様々な活動を行い、参加者全員がプログラムを修了しました。参加者の満足度は高く、多文化社会の担い手としてのコーディネーターが必要とされる社会状況の中で、注目される取組みとなりました。

社会連携ではさらに、三井物産株式会社の協力を得て実施してきた「在日ブラジル人児童むけ教材開発プロジェクト」が今年度をもって完了しました。ウェブ上で公開した教材のダウンロードは、延べ20万を超える件数に達しています。2008年7月に開催した、教材開発をめぐる全国フォーラムは、外国につながる子どもたちの教育に関わる人々に新たな交流とネットワークづくりの場を提供しました。また、新たにフィリピン人児童むけの教材もウェブ上で公開が始まっています。

本センターでは、以上のほかにも多様な事業を展開しています。その一つ一つを本報告書でご確認いただければ幸いです。今後とも本センターの活動に対し、ご理解とご協力をお願いいたします。